

竹浪流弱者の論理について

文学部 松 浦 道 夫

竹浪先生はちょうど私が大学を卒業したのと入れ替りに本学へ着任されました。ですから直接授業を受けることはありませんでしたが、いつの頃からか師と仰ぐようになりました。大学紛争中は教授会でよく席を隣りにしました。当時先生は重席で多忙と苦勞の連続でしたので、御立腹の時には私など若い者を相手に一席ぶたれたものです。その後、旧ソ連の代表団やスポーツ選手たちが来学した時には、私たちと共に何度か懇談されました。ロシア語を少しは勉強せねばと啓発されました。教授会では私語を嫌い、昇任や採用人事における先生の審査は厳しかった（当りまえかも知れませんが）ことを思い出します。私など審査されなくて助かったと思っています。もっとも、そのことを談笑の折りに話しますと「何言ってんだ、君はつまらん論文など書かずに、大学のためにしっかり働きたまえ」と尻をたたかれました。御自宅を訪ねたこともあり、難波で食事をしたり、飲んだりしながら、いろいろなお話しを伺ったものです。ずいぶん目を掛けていただいた思いがします。社会主義論も、大学論・学者論も、あるいは山や写真やスポーツについても竹浪理論を学ぶことができました。もちろん、先生は怠け者・無責任・騒音やカラオケなど、俗物を嫌っておられました。そういうところも厳しく感じられる理由のひとつでしょうか。

さて、先生のエッセイの中で「弱者の論理」というところがありました。多分に私への当てつけのような気がしないでもありませんでしたが、ともかくそれについて述べます。そのことのほとんどは私と正反対だと思って下さい。幼少の頃から体が弱く、小学校へ行っても体は小さくて、ケンカはも

とより、相撲やかけっこなど、おおよそ運動に関するものは駄目だったようです。それでもマイペースでできることはますますだったとか。家業を継ぐには体力がおぼつかなくて、勉学に力がはいったそうです。弱いから知力、精神力に磨きをかけたというのです。「強い者、健康な者は弱い者・病気の者の気持は分っとらん」といわれます。これでは私の立場はないではありませんか。でも、かなり当たっているところもあります。自らの弱点を武器にして、努力し、道を開いたというわけです。とはいっても、実際の先生は、まるで弱いこと、病気を自慢されているようなところの反面、コンディショニングづくりを心がけておられたようです。カメラを片手に山を歩き、体前屈や腕立て伏せなど、無理のない運動を続けておられるようでした。自分の仕事や目的に合ったコンディショニングをすればいいわけですから、本来のトレーニング論や体育の理にかなっています。

おわりに、まとめていいますと、先生はロマンチストで真面目な人に思えます。御退任は残念ですが、その心いきと学問への姿勢を、少しは見習いたいと思っています。